

- ☒ 話すこと ☐ 書くこと
 ☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実 ☒ 授業での活用 ☐ 家庭学習での活用
☐ パフォーマンステストでの活用 ☐ 課外活動での活用

実践の
ポイント

生成AIを活用した、授業における生徒の言語活動(主に「話すこと」)の充実

実証概要

<校数> 3校(高等学校:3校) <人数> 526名(高等学校:526名) <学年> 高等学校:2年(次)
 <アプリ等> WorldClassroom(株式会社HelloWorld)

<AI機能について>
 授業教材の音読等のスコアリング、AIキャラクターとのやり取り、音声又はタイピングで入力した原稿の文法に係るエラー修正

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AIとのやり取りを通したリサーチ(情報収集)

生徒は、身近な暮らしに関わる話題について考えを深めるために、AIとのやり取りを通して情報を収集する。例えば、「全員の活動に入るべきである」という論題のディベート活動では、まず自分の意見を考えた後にAIから反対意見を引き出す。AIから得た新たな視点を参考に自分の考えを再構築した後に、人とのやり取り(ディベート)を行う。この活動を通して、生徒は自分一人では気づかない視点や情報を得ることができ、多面的な視点から物事を考える力を育むことができる。
 ※プロンプトの例:I'd like to know more pros/cons of this topic.

●文字起こしデータを判断材料としたフィードバック

AIとのやり取りが文字起こしされたログを教師が確認し、生徒のエラーの傾向や受け答えの適切さ等を把握できる。教師は生徒の現状を踏まえて、エビデンスベースの指導を行う。生徒が誤った表現を使ってもAIは訂正しないまま会話を進めていくため、教師はログを見てエラーの訂正や適切な表現の提示(フィードバック)をすることが必要となる。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

特に「話すこと(発表)」の力が伸びた。AIとやり取りすることで生徒の発話量が増えたことと、AIからフィードバックを受けながら正しい発音で音読ができるようになったことが主な要因だと考える。

②児童生徒の関心・意欲の変化

AIを活用することで授業における生徒の言語活動の機会が増えたため、英語学習に対する意欲が向上し、また、英語をもっと上手に話したいという意識が高まった。

③教師の指導の変化

生徒がAIを活用して発表原稿の推敲や意見交換を行う中で、教員は生徒とAIのやり取りのログを見て、AIのフィードバックだけでは生徒の学びにつながっていない部分を教員が補うようになり、個別に生徒に指導する回数が増えた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●リーダーによる公開授業・研究協議会及び自治体独自の勉強会を実施

モデル校3校において、外部指導員からの指導を受けたAI英語活用リーダー3名が授業を公開し、AI活用についての意見交換と外部指導員によるAIの効果的な活用に関する講演を含んだ研究協議会を実施した。また、モデル校3校の実践をリーダー間で共有するための勉強会を、県内進学指導重点校教員の希望者を対象に実施した。公開授業・研究協議会についてはモデル校3校で実施し、実践内容の県内全域への普及を図った。リーダーは効果的なAI活用についての理解を深めたが、普及については課題が残った。教員がAIを使用する研修を実施し、AIが言語活動の充実につながることを教員自身が実感する必要がある。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●授業における生徒の言語活動の増加(成果)、目的を明確にしたAI活用(課題、今後の取り組み)

事業実施前と比較し、授業にやり取りや発表の活動を取り入れる機会が増えた。やり取りについては、授業の帯活動としてAIと対話する等、教師がやり取りの活動を事業実施前よりも気軽に授業に取り入れるようになった。今回は、AIを使ってみることで自身が目的になってしまった。今後は、今回の実証研究を通して明らかになったAI活用のメリット・デメリットを踏まえながら、人とのコミュニケーションにつながる有効なAIの活用方法を開発し、県内全域への普及を図る。